2025年度

慶應義塾湘南藤沢中等部入学試験問題

国　　語

	千位	百位	十位	一位		
受験番号					氏名	

注　意　1.　受験番号と氏名は、問題用紙および解答用紙のそれぞれに必ず記入すること。

2.　受験番号は、下記のように所定のらんに一字一字記入すること。

〔例〕　7 → 0007

77 → 0077

777 → 0777

4007 → 4007

3.　解答用紙の右下の ○ の中に受験番号の一の位を算用数字で記入すること。

4.　解答は、必ず解答用紙の所定のらんに記入すること。

5.　問題用紙の余白は下書きに用いてよろしい。

6.　この冊子の総ページ数は16ページである。

《指示があるまで開かないこと》

※　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
※　解答に句読点や記号などが含まれる場合は一字に数えます。

【一】　次の①～⑤の空らんにはそれぞれ、共通するひらがな二字が入ります。空らんにあてはまるひらがな二字を答えなさい。

①　□□つく　□□わめく
　　□□はらす　□□ねいり

②　□□けす　□□こむ
　　□□かかる　□□のぞく

③　□□こめる　□□かえる
　　□□あう　□□あげる

④　□□いれる　□□さがる
　　□□おこす　□□あげる

⑤　□□せまる　□□おく
　　□□ずめ　□□さわる

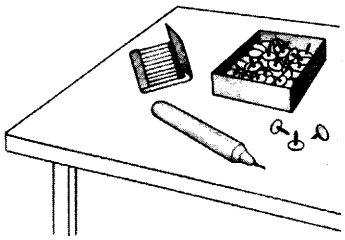
【二】　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ポアンカレ[注1]は数学の難問の解決（方法）に長い間取り組んでいました。連日の疲れもあり深い眠りにもつけないまま、うとうとした状態のときにいくつかの考えの群れが勝手に思い浮かんだと言います。そして、それらが互いに衝突し合って、そのうちの二つの考えが安定した組み合わせになり、ひらめきが生まれました。そのあと朝までには問題の解決が大きく前進したというのです。さらにまた別のときに、ポアンカレは苦労に苦労を重ねてもう少しで解決できるという仕事からいったん離れることになりました。どうしても用事で旅に出かけなければならず、この仕事のことは忘れていたと言います。ところが、乗合馬車に乗ろうとした瞬間に突然、難問の答えがひらめいたそうです。

ポアンカレ自身はこのような自分の体験を詳細に分析して一九〇二年に書き残しています。ひらめきというものは、その問題から一時的に離れて休んでいる間に無意識的な活動がおこなわれ続けることによって得られる。[A]、このような無意識的な活動のまえには、徹底的に集中して考え抜くことが重要である、というように述べています。

このポアンカレの話のように、意識的に問題の解決に取り組んでいるときではなく、その問題から距離をおいた、なかば無意識の状態で突然のひらめきが現れることが多いのです。

（中略）



では、なぜ意識的に集中しているときにひらめきは生じないのでしょうか。その理由の一つは、解決に集中するあまり、問題を一面的にしかとらえられなくなっているからだと思われます。図は、そんな一面的なカマ[a]えを調べるためのロウソク問題と呼ばれるものです。解決しなければならない問題は、この図にある材料だけを使い、火をともしたロウソクを壁に固定するというものです。この問題を考案した心理学者によると、正答できたのは七人中三人（四三％）だけだったということでした。

（中略）

この問題の正解は、まず画鋲を箱からすべて取り出して、その箱を画鋲で壁に固定し、マッチで火をともしたロウソクの台として使うことです。この問題が難しいのは画鋲の箱を画鋲を入れるものというように一面的にしか見ることができず、本来の用途以外の使い方に気づかないことが原因と言われています。事実、この問題を考案した心理学者が事前に［1］、別の七人の協力者は全員正答できました。

このロウソク問題は正答が一つなので、創造性のような正答のない問題とは同一に論じることは必ずしもできませんが、ひたすら問題だけに集中することのマイナス面をあらわしていると思われます。

（中略）

禅の世界でよく知られていることばに「香厳撃竹大悟」というものがあります。禅には公案と呼ばれる問題があり、そもそも答えがあるのかないのかすらわからず、解くのが難しいものが数多くあります。「隻手の声」として知られる「両手を叩くと音がする。では、片手の音とはなんだろう」といったものが代表的な公案です。

その昔、中国の唐の時代に香厳というトウダイ[b]きっての秀才がいました。出家して禅師となったのですが、ある公案をどうしても解くことができずに、自分の無能さに失望して田舎に引っ込んでしまったそうです。そんな香厳が山中で掃除のため草や木を取り除いていたとき、たまたま投げ出したものが竹に当たってカチンと音がしました。そのとたんに香厳はあの公案の意味を悟ったといいます。これが、香厳が竹に当たる音を聞いた瞬間に悟りを開いたという「香厳撃竹大悟」のユライ[c]なのです。

この話を引用している日本の仏教学者であった秋月龍珉は、この香厳の悟りに至る過程について無意識のはたらきに注目して次のように書いています。「香厳ほどの秀才が、たとえみずから意識の上では公案の工夫をやめたと考えていても、それであの根本的な問いから離れることができたとは考えられない。無意識のうちに、彼は深くこの問題に沈潜し、ともすれば彼の精神はかの一点に集中されていったと思わ

れる。心の一隅に一たび投じられたかの波紋は、必ずやいつか心全体にひろがらずにいない。」

ロウソク問題とは異なり、単一の答えのない公案にかかわる悟りとひらめきの過程はとてもよく似ています。先に例に出したポアンカレは、創造性の本質とは無からできあがるものではなく、きわめて「かけ離れた」要素の新たな組合せを無意識によって選択することにあると言っています。

ジェイムズ[注2]は、無意識の記憶の存在を確信していました。そして、忘れてしまったことがらを思い出そうとするプロセスと、目のまえの未知の問題を解決するプロセスが本質的に類似していると指摘しています。違うのは前者がすでに私たちの無意識の記憶にあるのに対して、後者はそうではないというのです。これまで述べてきたように、多様な連想の重なりが忘れてしまった無意識の記憶を引き寄せるのであれば、同じプロセスである未知の問題を解決することにも連想が有用であると考えることができます。

[B]、ブレイン・ストーミングという名前で知られている創造性を伸ばす方法の基本は、一人ないしはグループで思いつく限りの無数の連想をおこなうことから始まります。無数の連想をおこなわなければならないために、ありきたりの連想が尽き果て、しまいにはかけ離れたユニークな連想が自動的に思い浮かびやすくなるのです。

何らかの問題の解決に[2]的にかかわったあと、いったんそこから離れた状態でひらめきが起こることが多いのはなぜなのでしょうか。おそらく徹底的に考えつくしたあと、そこから離れることで無意識に沈んでいる連想のつながりが意識に浮かび上がりやすくなるのかもしれません。ここで重要なことは、当該のリョウイキ[d]に関連した膨大な知識をもとに[3]をおこなっておくことがひらめきをもたらすということだと思います。ひらめきが無意識の記憶内での連想に関与しているかどうかは、今のところまだジッショウ[e]できないにしても、連想に関して断言できることがあります。私たちは誰もがみな生きていくなかで様々な人々と交流をもち、成功や失敗、喜怒哀楽といった感情をもちながら、一瞬一瞬、人生の経験を積み重ねてきています。これら人生の経験は一人として同じものはありません。この人生経験の違いこそが無意識の記憶と合わさって、個人特有の[4]傾向を生み出すのです。

（中略）

私たちは記憶の蓄積という点でAIに勝つことはできません。おそらく今後は古今東西の全世界の知識やネット空間に発信される情報がAIに集積されていくことでしょう。そして、そういった膨大な情報量をもとにAIも自由に連想を生み出すようになるはずです。[C]、そこには私たちと違って、本質的には何一つ独自性は見られないでしょう。なぜなら私たち一人ひとりの記憶や知識や人生経験の違いに根ざした、無意識のはたらきである連想の独自性というものは、AIには絶対に真似のできないものだからです。そのような意味で、私たち一人ひとりは誰もがみな創造性にあふれた存在なのです。

（高橋雅延『記憶の深層――〈ひらめき〉はどこから来るのか』より）

※出題の都合上、本文の一部を改稿しています。

注1　**ポアンカレ**　フランスの数学者。
注2　**ジェイムズ**　ウィリアム・ジェイムズ。アメリカの哲学者・心理学者。

問一　――a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　空らん A ～ C にはそれぞれ、次の語のどれかが入ります。最も適切な語を選び、記号で答えなさい。

ア　ただし　**イ**　では　**ウ**　たとえば　**エ**　けれども

問三　空らん 1 に入る言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　さらに画鋲を足しておくと
イ　画鋲をすべて箱の中にもどしておくと
ウ　画鋲を箱から出しておくと
エ　ロウソクをもう一本用意しておくと
オ　マッチとロウソクの場所を逆にしておくと

問四　「後者」が指す内容を本文中からぬき出し、最初と最後の五字を書きなさい。

問五　空らん 2 には漢字二字の語が入ります。次の選択肢から漢字を二つ選び、空らんに入る語を完成させなさい。

〈選択肢〉
果　全　効　識　体　徹　接　意　直

問六　空らん 3 にあてはまる最も適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　徹底した実地での調査
イ　徹底した連想の練習
ウ　徹底したひらめきの追求
エ　徹底した意識的な思索

問七　空らん 4 には本文中の漢字二字の語が入ります。最も適切な語をぬき出して答えなさい。

問八　次から本文の内容に合うものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア　ポアンカレがひらめいたのは、問題をどうしても解けずにあきらめた時である。
イ　連想することで私たちは、すべての記憶を引き寄せることができる。
ウ　AIを使いこなすことで、私たちは創造性にあふれた存在になることができる。
エ　香厳が公案の意味を悟ったのは、無意識のうちに深くこの問題に沈潜していたからだと考えられる。

【三】　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

冬を越したナナホシテントウ虫の卵がかえる頃、すっかり河原の野花も元気に咲きだす。マコとユウも五年生になった。

（中略）

その日は初めての委員会活動だったので、みんな少し緊張しているようだった。

担当の先生は小野先生という若い女の先生だった。初 I 合わせだったのでそれぞれ自己紹介をした。

そのあと先生からこれからの活動内容についての話があった。エプロンチェックや残飯調べ、配膳の手伝いなどが主な活動だった。その中でマコがおもしろそうだと思ったのは、低学年に栄養について紙芝居をしに行くというものだけだ。

先生が黒板に書いたことをみんなお行儀よくノートに書き写していた。マコも、同じように給食委員会のために下ろした新しいノートに、できるだけていねいに書く。後ろをふり返ってチラリと見ると、ユウと目があったのであわてて前を向く。

「ノートに書き写したら、四人ずつグループになって他に給食委員会でどんなことができるか話し合いましょう」

小野先生の指示で、三つのグループに分かれて話し合いを始めようと机の移動をする。ユウとは別のグループだった。

マコが同じグループになった西岡修の近くへ机と椅子を運ぼうとしたその時だった。

「先生、俺こいつと一緒のグループはいやです」

西岡修はマコを指さして大きな声を出した。みんないっせいにマコを見た。六年生の西岡修とは話をしたことはないが、去年の運動会で応援団をしていて、まわりの女子がイケメンがいると、わざわざそばまで見に行ってキャーキャー騒いでいたので、なんとなく顔は覚えていた。

小野先生がなにか言おうとしたけれど、その前に西岡修はこう続けた。

「俺、おまえのこと知ってるぞ。毎週日曜日になると屋根に変なでっかい足がのった家に通ってるだろ。あいつ、成田夕夏も一緒に歩いてるの見たぞ！　おまえはともかく成田夕夏はもっとまともなヤツかと思ってたけど、おまえらやっぱ変わりもんだな」

マコがユウを見ると、ユウはすでにまっすぐ立って西岡修をすごい形相でにらみつけていた。

ユウは、こういう時言いたいことを言葉にせずじっと黙っている子どもだ。決して涙も見せない。

修はその目線には気づかないのか、トーンをあげて話し続けた。

「俺のお母さんが言ってたけど、あそこにいるおじさんは頭がおかしいから絶対近づくなって。おまえの親もよくもあんなところに平気で子どもを行かせて、どうかしてるってさ。あのおじさんの息子は俺の兄ちゃんと同じ高校出身だけど、暴走族に入っていて何度も警察に捕まってたって今でも有名らしいぞ。親が親だから子どもも子どもなんだって。しかもあのおじさん、ボロ小屋に住んでいっつも汚い服着て変な目つきして土手を歩いてるだろ。おまえらみたいな変人ジジイの仲間と机くっつけるの俺、絶対いやだから！」

マコの心臓は今まで聞いたことのないくらい大きな音で鳴り出した。全身のすべての血液が顔のあたりに一瞬で集まってくるのが、自分でもわかった。

それから先のことはあまり覚えていない。

自分よりもずいぶん体の大きな上級生に机を乗り越えて飛びかかってタックルし、そのまま馬乗りになって修が手に持っていたアルミ製のペンケースを窓から投げ捨てたというのだ。

マコが気がついた時、西岡修はわんわん泣いていて、数人の六年生が彼の近くに集まってなぐさめていた。修のおでこには引っかき傷ができて、少し血がにじんでいる。他のまわりの子どもたちは、いっせいになんとも言えない目でマコを見ている。

ユウはさっき立っていた場所で、マコが見た時と同じ格好のまま、下唇を噛みしめて一点をにらみつけていた。

マコは声をあげて泣きたい気持ちだったが、みんなの前で絶対に泣きたくなかった。けれど、ちょっとでも声を出したら涙があふれてしまいそうで、何も言わずに教室を走って飛び出した。

「海老原麻子さん！　麻子さん！　教室に戻りなさい！」

かん高い小野先生の声が廊下に響いた。

ママが学校に着いた時は、担任の清水先生と小野先生、西岡修とその母親が五年一組の教室にいた。マコもその輪の中にポツリと座っている。

とうに下校時間を過ぎていたので、他の子どもたちは誰もいなかった。マコの隣に用意された椅子にママが座った。

ママは修のおでこのばんそうこうに目をやった後、マコをじっと見つめた。

それから姿勢を正すと「いったい何があったのでしょうか」と A たずねた。

「聞きたいのはこっちのほうよ！　修のおでこの傷！　おたくの子がやったんですってね。しかもペンケースをうばって窓から投げたなんて！　変わってるお子さんだと聞いてはいたけど、女の子のくせに暴力振るうなんて。いったいお家でどういうしつけをしているのかしら!?　先生もいたところで起こったっていうじゃないですか。だから若い先生は困るのよ。ちゃんと見ていてもらわないと！」

修のお母さんが声を荒らげて机をバンバンたたきながらまくしたてていると、隣にいた修がおでこを押さえながらまた a 泣きべそをかきだした。もう片方の手で、へこんで形の変わってしまったミッキーマウスのペンケースをひざの上で握りしめている。

「痛かったよね、怖かったね、もうお母さん来たから大丈夫だからね」

息子の頭をなでながら、修の母親はママをにらみつけた。

ママは一回呼吸を大きくした。

「そうでしたか。うちの娘が大切な息子さんにケガをさせてしまい本当に申し訳ありませんでした。今後絶対にないように家で厳しく言って聞かせます。ペンケースも弁償させてください」

それから深々と頭を下げた。

マコは西岡くんを引っかいたのも、ペンケースを窓から校庭に投げたのも私だから、にらむのもどなるのもママじゃなくて私にしてほしい、それに、西岡修が先に私を仲間はずれにして傷つけたんだ。そう思ったとたん、横から伸びてきたママの手に頭を後ろから b 押されて、マコも頭を下げる格好になった。

「マコ、修くんになんて言うの!?」
ママの厳しい口調よりも、頭を押すママの手の力が思ったよりも強いことに、マコは少なからずショックを受けた。
「西岡くん、ごめんなさい」
こんなにくやしくて、私だって言いたいことがあふれるぐらいあるのに、マコはなんとかこの言葉を選んでそれだけを［Ⅱ］にした。
西岡修はまだメソメソしながら赤ちゃんみたいに、うん、とうなずいた。
修の母親はほんの少し口角をあげて首を伸ばして、ママを上から見下ろした。
「二度と、このようなことがないようにお願いしますね。それから、よそのおたくの教育方針に口出すつもりはないけど、土手沿いの美術教室の吉本さんって方、近所の有名な要注意人物だってことはご存じですよね。朝から酒臭いにおいさせてふらふらしたり、河原で女子高生をじっと見つめていたりするってうわさを知らないの？　あんなところに通わせるなんておやめになったほうがいいんじゃないかしら。芸術家だっていうけれど、意味不明な置物ばかり庭に置いて、注1芸大出だっていうのも本当なんだかどうだか。おたくのお嬢さんもこうしてすでに悪い影響を受けてるようですし。ねえ」
ママは長いまばたきを一回した。それから「はい。ご心配くださってありがとうございます」とだけ答えると、もう一度深呼吸をした。
修の母親は今度は体を清水先生と小野先生に向けると、また机をたたき始めた。
「で、学校としては、どうしてくれるんですか!?　こんな暴力を平気で許しているようなら、今後の対応を考えなくてはいけないと、主人とも話してきましたから」
「お母様のお気持ちはごもっともです。管理職にも報告して、若い教員の指導をしっかりいたしますので、今回は本当に申し訳ありませんでした」
清水先生も頭を下げた。
小野先生はずっとうつむいている。まだ教員になって二年しか経っていないし、おとなしく、華奢な体で声も小さいからか、男子にからかわれたりしている姿を廊下で見かけたこともある。
「で？　現場にいた当のご本人の小野先生からは何も謝罪がないようですけど、ご自分の責任、あなた、わかってんの？」
さらに語気を強めて、修の母親は小野先生に詰め寄った。
マコはやっぱり、これは私がやったことで小野先生のせいでもママのせいでもない、ましてやオッサンのせいでもない。どなるなら私だけにしてくれ、どうしても今ここでそのことを言わなければならない、と覚悟を決めて声に出そうとした。
その時、小野先生が顔をあげた。震えているがいつもより大きな声だった。
「私がしっかりしていないせいで、今回のことを止めることができず本当に申し訳ありませんでした。もっときちんと指導していたらこんなことにはならなかったと思います。麻子さんが修くんを引っかいたことも、ペンケースを外に投げたことも絶対にあってはならないことです。麻子さんもこうして厳しく注意を受けて反省したと思います。でも麻子さんがどうしてそんなことをしてしまったのか、ちゃんと麻子さんの話も聞いてあげるべきだと思います。だって」
すると今度は小野先生の話の途中で、その言葉にかぶせるように清

水先生があわてて話し出した。

「とにかく本当に申し訳ありませんでした。その場にいた子どもたちにもヒアリングをして今後このようなことがないように、しっかりホームルームで話し合いをさせますし、修くんの担任はもちろん、管理職にも必ずこの件は伝えます。小野先生も着任して三年目、若さゆえ右も左もわからない状況ですから、どうか今日はお許しください」

それを横で聞いていた小野先生も一緒に頭を下げた。

それから小野先生は、ななめ向かいに座っている修に目をやり、机の上に置かれた修の手に自分の手をそっと重ねた。

「修くん、どうして麻子さんが修くんを引っかいたか、理由、わかるよね？」

B たずねた。

修は何も答えずうつむいていた。

話し合いが終わると、もうすでに小学校の正面玄関は閉まっていた。職員室の真向かいにある職員専用の出口をあけて、ママとマコは子どもたちがふだんは使わない黒い鉄の門を抜けた。学校から家までの道はいつもと違う景色に見えた。マコは涙が止まらなかった。

オッサンを変人ジジイだと言われたこと。パパやママの悪口を言われたこと。みんなの前で指をさされて仲間はずれにされたこと。顔がすごく熱くなって自分が自分じゃないみたいになった。ユウを教室に一人残して自分だけ逃げ出した。ママが自分のしたことのせいであんなに深く頭を何度も下げている姿。いつもと違う小野先生の声。西岡修のおでこににじんだ血の赤さ。マコの頭の中をそれらがグルグルと順番に回る。

マコはもともとひょうきんで明るい性格だ。周囲からも無邪気な子どもに見える。でも、マコは学校にいる時、いつもなんとなく、疎外感のような、違和感のような、他の子と違って、ひとりだけみんなから冷たい目で見られているのをほんの少しだけおぼろげに感じていた。でもそんなことは気のせいだろうと思うようにしていた。それが今日、西岡修に言われた一言で、不安に思っていたことが、マコの中ではっきりと現実になった。私はみんなから疎外されている。それは私が変な子だからなんだ。でも他の子と比べて何が違って、どこが変なのか、いくら考えてもわからなかった。自分の思う「普通」と他の人の思う「普通」が異なることが悲しい、と思った。

「私、仲間はずれにされたんだよ。オッサンのことも変人ジジイだってバカにされたんだもん。どうしてあやまらなければならなかったの？　なんで、ママまであやまったりするの？」

マコは目に涙をいっぱいためて、しゃくりあげながらママの横顔を見上げた。

ママは歩みを止めると、しゃがんでマコの肩に手をかけた。

「あのね。マコ。理不尽だと思うことがあった時、暴力ではなくて別の方法で相手に向き合ってほしいの。それから、人はあやまりたくなくても、たとえどんな理由があったとしても自分がやってしまったことに対して向き合ってちゃんとあやまらなくてはいけない時もあるのよ」

ママはマコの汗ばんだおでこにはりついた前髪をかきあげながら話を続けた。ママはマコに大切な話をする時にたいていそうする。だからマコも一言も逃さないように聞く。

「私が西岡くんにケガをさせちゃったから、それは悪いことだと思う」

「そうね。どんな理由があっても暴力で相手を傷つけることはしないでほしいとママは思う」
「じゃあ、そうではない別の方法って、どうすればいいの？」
ママは少し考えてこう答えた。
「それは言葉かもしれないし、マコの大好きなお絵描きかもしれない。そう、マコにはお絵描きがあるじゃない！　マコがどうして悲しくていやな気持ちになったのか、ちゃんと西岡くんやみんなに暴力以外の方法で伝えることができたなら、きっと今、マコもこんなに傷ついていないかもしれない」
「そうかもしれないけれど、でも、私、指をさされて向こうへ行けって言われた時、とてもつらくて悲しくて、顔が熱くなって体が勝手に動いちゃったの。教室にいるお友だちがみんな怖い人に見えたの。もうこんな怖い思いは二度としたくないよ」
この気持ちを、言葉やお絵描きで説明したりするなんてできそうにない、とマコは思う。できそうにないけど、そうできたらいいな、とも思う。西岡くんを引っかいて傷つけてもマコの気持ちは晴れることはなかったし、何も解決することはなかった。それどころか西岡くんのおでこににじむ赤い血を見た時、疎外感を上塗りするように、さらにマコの心は傷ついたのだ。
ママはマコのその気持ちを察したようにやさしく笑って、マコの体を両手で引き寄せた。
「マコは吉本先生の彫刻を見て楽しくてうれしい気持ちになるって言ってたでしょう？　それに、先生に初めて出会った時、怖そうだし変な人って思ったけど、作品を見たらいっぺんに大好きになったんでしょう？　西岡くんにもそのすてきさを教えてあげなくっちゃ。きっと西岡くんは知らないからそんなふうに言うのかもよ」
マコは西岡修や学校のみんなが吉本太美術教室にやってきて、オッサンの彫刻や絵を見て目をまんまるくする姿を想像した。私の好きなものをみんなも好きになったら、どんなにうれしいだろう。もしかしたら西岡くんとも仲良くできるのかな。
「マコがきれいだな、好きだな、と思うものを見つけたらみんなにも教えてあげようよ。もしも一所懸命に伝えてみて、どうしてもわかってもらえなかったとしても、それでも人を傷つけてはいけません。伝えること、表現することをあきらめないでほしいの。マコはそれができる子だと思うから」
ママはマコの目の奥をじっと見つめて、マコの手を握る。
「それからマコは変な子じゃない。ユニークって言葉知ってる？『唯一無二の特別な存在』って意味なのよ。マコは変な子じゃなくてユニークな子だとママは思うよ」
「そうかな、私はユニークな子なのかな」
「そうよ。マコはユニークな子。マコにしかないユニークさを大事にしないとね」
「わかった。私、何があってもボウリョクはしない。ママも悲しむし、私も悲しいから。あとは、言葉でとか、お絵描きでとか、うーん、どうしていいかわからないけど。でも私、仲間はずれにされたり、いやな気持ちになった時、それをちゃんと伝えたいと思った」
マコはうなずいた。全部を理解できたわけではないし、納得できたわけでもない。けれどヒョウゲンをあきらめない、と思った。
ミドリ公園の角を曲がる頃、口をぎゅっと閉じて、目をつぶって、それからマコは泣きやんだ。

（中略）

学校へ行くと、マコは家や吉本太美術教室にいる時のように、自由なふるまいができない。先生にしつこく質問したり、授業中にうろうろ歩き回ることも少なくなった。クラスには流行りのドラマや流行歌に詳しい華やかな女子グループと、あまり目立たない地味なグループがあった。マコはどちらにも属することはせず、あえてみんなと仲良くするように心がけた。そうしてみると、［　1　］が多くなった。集団から疎外されることと、自ら一人を選ぶことはまったく違うことに気がついた。オッサンはあえて一人でいることを選んだのだろうか。

担任の清水先生には「麻子さんは最近お姉さんになって、みんなと平等に仲良くできるしすばらしいですね」と言われたけど、内心マコは我慢ばかりしていた。頭ではわかっていても、オッサンのように「まわりにどう思われても上等だぜ」なんて、なかなか思えない。毎朝教室の扉をあけると、学校用の自分に変身するために、えいやと少しだけ装った。だから大人にほめられても違和感を感じてしまう。初めは小さかったズレは、マコの中で少しずつ大きくなっていったけれど、その変化に気がついてくれる人は、まわりにはいなかった。マコは校門を出たとたん、いつものノーテンキでユニークなマコに戻るからだ。

図画工作の時間は二時間続きだ。マコは学校の図工の時間はあまり好きではない。合田先生という白髪のおじさん先生は、モゴモゴ滑舌が悪くて何を言ってるかわからないし、とにかくモチーフ[注2]もテーマもマコにとっては退屈だった。吉本太美術教室で鍛えられているマコの描く絵は、そりゃあ学校内では［　Ⅲ　］を抜いてじょうずだった。合田先生はいつもマコの絵をほめてくれたけれど、マコはそれもあまりうれしいと感じていない。なんだかピントがずれているようで、わかってもらえている気がどうしてもしなかった。

その日の図工の授業は五、六時間目だった。校庭の花壇に面した図工室の窓からは、背伸びした大輪のひまわりがまぶしい。

「自分の心を絵で表現してみよう」というテーマだった。マコは久しぶりにおもしろそうなテーマだと体を前のめりにした。

合田先生は白い四つ切り画用紙を子どもたちに配ると、

「人間の感情には喜怒哀楽があります。四つの中から一つ選んでその感情の色や形を想像して描いてみましょう。使っていいのは鉛筆とクレヨンと水彩絵の具、難しいテーマだけど挑戦してください。画用紙は横描き。描き終わったら右下に名前。はいスタートね」

と、やっぱりモゴモゴと説明をした。

図工室の木製のズッシリした机の天板をじっと見つめてから、[2]マコは自分のどんな感情を描こうか決めた。それから画用紙を縦にすると、真っ赤な絵の具と、あずき色の絵の具を使って、上に向かって長く続く階段を描きだした。階段の一番下にはこちらをにらみつけて立っている水色のワンピースを着た幼い少女を描いた。赤い階段はみんながびっくりするくらいしつこく赤色を何度も重ねる。絵の具の上からクレヨンを重ね、また絵の具を重ねる。同じ色をずっと同じ場所に塗り続けていると、ある瞬間、色の中に深い穴のような空間が生まれる、とオッサンが言っていたのを思い出す。穴に吸い込まれそうになるま

でひたすら塗り重ねた赤は、ゾッとするような迫力を帯びた。少女の瞳はみんなが怖がるくらい鋭く美しく描こう。彼女のぬれたようなまつげの一本一本まで細筆で慎重に描く。授業と授業の間の中休みの時間も、マコは作品に没頭した。それは、小学校五年生が描いたとは思えない大人びた絵に見えた。

キンコーンカンコーンキンコーンカンコーン。

「はーい。できた作品を提出してください」

授業終わりのチャイムが鳴ったが、マコはまだ描き終えていなかった。[Ⅳ]に返ってまわりを見渡すと自分だけ縦で描いてしまっている。みんなにわからないように絵を裏返しにすると、横に向けて先生の机の上にスッと提出して図工室を出た。

「みなさん、さようなら。先生、さようなら」

帰りの会が終わり、日直が号令をかけて子どもたちがそれぞれ帰り支度を始めた。

「マコちゃん、今日、あさこちゃんと、ちえちゃんと、家でスーパーマリオ大会するんだけど、マコちゃんも遊びに来ない？　それにお菓子も持ちよって、みんなで食べようよ」

人なつっこい笑顔でマコに声をかけてきたのは、クラスメイトのますみちゃんだった。

マコが、学校で目立たないように心がけてから、こうして時々遊びに誘ってくれるクラスメイトができた。誘われるのはうれしかったけれど、ファミリーコンピュータ[注3]の画面も、にぎやかなゲーム音楽もマコはなぜか頭がクラクラしてしまうので苦手だった。友だちといるのは楽しいけど、一緒に遊んだ帰り道はズシンと肩に何かのっているように重かった。それでもせっかくますみちゃんが誘ってくれてるんだから、行こうと決めて笑顔を作ったその時だった。

「麻子さん、この後、図工室まで来てください。合田先生からお話があるそうですよ」と担任の清水先生から声をかけられた。

マコはますみちゃんに向けた笑顔を崩さないまま眉間にシワを大げさに寄せて、顔の前で手を合わせて、

「ごめん、先生に呼び出されちゃった。今日は一緒に遊べなそう。実は今日の図工で描いた絵、私、間違えて縦描きにしちゃったから。多分それで呼び出されたんだと思う～」

と[　2　]断った。

「そっか。残念。次は遊びに来てね！」

ますみちゃんはランドセルを持つと、手をふって教室を出ていった。

トントン。

図工室の扉をノックするとすぐに合田先生の「はーい」という声が聞こえてきたので、ガラガラと教室の引き戸をあけた。

中央の机に座っている合田先生とブルータスの石膏像が[C]こちらを見た。窓から差し込む真夏の西陽に照らされて、さっきマコが授業で描いた赤い階段と少女の作品が一枚だけ机の上にポツンと置かれていた。図工室がいつもよりずっと広く感じられる。

マコは先生に向かい合うように席に着くと、先に話し出した。

「すみません。横書きなのに間違えて縦書きに描いてしまいました。家で描き直してきます。しかも、まだ途中だし」

先生は首を横にふると、マコの顔をのぞき込む姿勢になった。

「いやいや、縦に描いたことくらい本当は大したことではないよ。廊

下に飾る時に先生が飾りやすいから横描きって言っただけなんだし。それより、この作品、とてもよく描けているし、すばらしい。本当に美しい赤だよね。でもね、見ていてちょっときみのことが心配になったんだよ。麻子さんは、何か不安なのかなって。何か迷っていたり、つらいことがあるのかな？　この階段の下にいるのはきみ自身だろう？」

マコはびっくりした。確かにマコは学校にいる時の自分の気持ちを絵に描いた。どうせ伝わらないと思っていた合田先生が、絵を見てマコが選んだテーマを言い当てたのだ。

「学校にいる時の気持ちを描きました。喜怒哀楽の四つの中から選べなかったから、それもルール違反なのだけど。先生には伝わってよかったです。わかってくれてうれしいです。私、将来画家になるので、このくらいは絵で伝えられないと！」

マコはわざと明るくケロリとそう言いはなった。

マコは少し高揚して、そして満足していた。先生に心配してもらったからではない。気持ちを理解してもらったからともまったく違う。自分の描いた絵が人の心にどんな形であれ引っかかりを持ち影響したんだ、と思えたからだ。

あの日、ママがした話は本当だと思った。描くことは時に暴力や言葉よりも、強い力を持つ。マコがマコらしく自分を［3］できる可能性があることを、初めて実感した出来事だった。

（蟹江杏『あの空の色がほしい』より）

※出題の都合上、本文の一部を改稿しています。

注1　**藝大**　東京藝術大学の略称。
注2　**モチーフ**　作品の主題。
注3　**ファミリーコンピュータ**　テレビゲームの一種。

問一　空らん［Ⅰ］～［Ⅳ］には漢字一字が入ります。文章の内容に合う字を考え、書きなさい。

Ⅰ　初［　］合わせ
Ⅱ　それだけを［　］にした
Ⅲ　［　］を抜いて
Ⅳ　［　］に返って

問二　空らん［a］～［c］にあてはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　ポロリと　**イ**　トンッと　**ウ**　ギョロリと
エ　シクシク　**オ**　グイッと　**カ**　ふわりと
キ　きょとんと　**ク**　さめざめ　**ケ**　楽しげに

問三　空らん［A］・［B］には、声の様子を表す表現が入ります。最も適切と考える表現をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A　**ア**　あわてたように　**イ**　静かな口調で　**ウ**　たたみかけるように
B　**ア**　小さな声でやさしく　**イ**　とりつくろうように　**ウ**　腹立ちがおさまらない様子で

問四　〜1には、「小野先生の話の途中で、その言葉にかぶせるように清水先生があわてて話し出した」とあります。清水先生がそうしたのはなぜでしょうか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　小野先生のかわりに自分が説明してあげようと思ったから。

イ　担任ではない小野先生がマコの気持ちを語るのは筋違いだと思ったから。

ウ　自分がすでに説明したはずの話をもう一度小野先生がしようとしたから。

エ　修が原因をつくったことを小野先生が言うのではないかと思ったから。

問五　空らん［1］にあてはまるものは次のどれでしょうか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　あれほど自由な環境を求めたはずなのに、自由でいると逆に落ち着かないと思うこと

イ　あんなに一人になるのが怖かったくせに、一人になりたいと思うこと

ウ　いつかはみんなに疎外されるだろうという心配をぬぐえず、一人にはなりたくないと思うこと

エ　思っていたよりみんなは優しくて、クラスメイトを恐れていた自分をばからしく思うこと

問六　空らん［2］にあてはまるものは次のどれでしょうか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　さも得意気に

イ　すべてを包み隠さず

ウ　なるべく明るくていねいに

エ　ほっと安心したように

問七　空らん［3］には漢字二字の語が入ります。本文の内容に最も合う語を補い、文を完成させなさい。

マコがマコらしく自分を［3］できる可能性があることを初めて実感した出来事だった。

問八　〜2で描こうと決めた感情について、マコは後ほど先生に「学校にいる時の気持ちを描きました」と話しています。では、マコは自分のどんな「気持ち」を描いたのでしょうか。本文中の言葉を適切に使いながら説明してみてください。

【四】　次の絵を見て、あとの問いに答えなさい。

問一　絵に、十字以内の題をつけてください。

問二　なぜその題をつけたのか、理由を一五〇字以内で説明してください。

※原稿用紙の使い方に従って書くこと。ただし、一マス目から書き始め、改段落はしないこと。

（絵の出典）　Norman Rockwell：332 Magazine Covers

〈このページに設問はありません。〉